

軍記物語の女性たち（8）

こ ざい しょう
小 宰 相 —『平家物語』より—

岡崎 嘉彦

小宰相は参議藤原憲方の娘で、上西門院統子（統子内親王）に仕えていた。その容貌は大変美しく、宮中一の美女と謳われていた。

小宰相の美しさに平通盛は一目惚れし、三年もの間、恋文を送り続けた。小宰相は、始めは意にも返さず文も読まなかったが、通盛の真剣な想いを受けるにつれ、次第に通盛へと惹かれていく。しかし、まだ若い小宰相は、その想いを通盛に伝える事が出来なかった。このような二人を見かねた小宰相の上司である統子が、仲を取り持ち、ようやく二人は結ばれることになる。通盛には妻である平宗盛の娘がおり、小宰相は側室となるが、二人はとても仲睦まじく幸せな日々を送っていく。しかし、源氏が兵を挙げると、栄華を誇っていた平氏は見る影もなく敗戦を重ね、西国へと落ち延びることになる。平家一門の多くの武将達が、妻子を都へ残していく中、小宰相は都に残るか、通盛と共に西国へ落ちるかかの判断を迫られる。小宰相は悩んだ末、愛する通盛と共に西国へと向かう。この地で、勢力を盛り返した平氏は、再起をかけて一ノ谷に布陣する。

沖合の小舟で寝起きする中、合戦に赴く通盛に、小宰相は自分が身籠もっていることを初めて告げる。お腹の子供の為に、何としても生き延びて欲しいと小宰相は懇願する。通盛も喜び、何があってもその子を育てて欲しいと小宰相に告げる。しかし、小宰相の願いも虚しく平氏は敗れ、通盛も行方知れずとなる。そして、安否を気遣う小宰相の元に、湊川の戦いで通盛が討死したという知らせが届き、小宰相は大変な衝撃を受ける。

数日後、心配する乳母の僅かな隙をつき小宰相は、お腹の子と共に船縁を超えて海へ入水する。僅か十八歳という余りにも若く、通盛への一途な愛に生きた生涯であった。

上西門院統子の元にいた小宰相は思いがけずも、妻帯者で若き平家の武将通盛と出会った。初めは通盛の片想いから始まったが、通盛の積極的

な求愛はやがて、小宰相の心を動かし二人は結ばれる。通盛は、平家の総帥である平清盛の異母弟、教盛の子で清盛の甥に当たることから、一門での位が高かった。通盛の側室となったことは、小宰相にとっても幸せな人生を送れるはずであった。

しかし、小宰相の運命は平氏に嫁いだことにより劇的に変わっていく。上級武士の側室の特権として戦地に赴いたが、思いもよらない生活を送る事となる。華やかな都で育ってきた彼女にとって、草深い西国での度重なる苦難は過酷なものであった。源氏の逆襲に会い、日を追う毎に不安は増す一方であったが、それでも小宰相は通盛を信じ、再び安寧な生活に戻れることを夢見て、日々の慣れない生活に耐えていくのである。

一ノ谷の合戦の前夜、今生の別れとなる事を恐れ、通盛の生還を願う意味から、これまで秘めてきた子どもを宿しているという大事を告げる。

それは、この子の為に何としても生きて帰ってきて欲しいと願う小宰相の深い愛情であった。しかし、通盛が帰らぬ人となってしまったことで、年若い小宰相の心に大きな穴が開いてしまう。思えば京を離れ、遠く西国まで来たのは、ひとえに愛する通盛と常時共にありたいとする女心であった。しかし、その想いは報われず、小宰相は愛人を失った事で孤独と失意に苛まれ、お腹の我が子と共に海の中へと旅立つ道を選んだのである。そこには、彼女の弱さと反面、通盛唯一人を愛するという彼女の強い想いがあった。混沌とした時代の中で、ただひたすら「愛」を信じた女性であった。哀しい生涯を辿った小宰相の死は、平家の武将を取り巻く多くの女性たちが流した涙の一滴なのでしょうか。

■主な参考文献、そして、今回おすすめする図書

○永積安明著 『軍記物語の世界』 岩波書店 2002年。

おかざき よしひこ（司書・係・情報サービス課）